

洋画家桜庭彦治の従軍軌跡

―戦前絵葉書的美術史拾遺―

彭 国 躍

1. はじめに

戦前従軍画家の実態―その派遣人数、組織系統、地域分布や作品図版などにおいて、多くの謎が残っている。管見の限り、従軍画家の派遣時期や人員に関する各種文献集成の中でデータがもつともそろった資料として飯野（2005）を上げることが出来る。飯野（2005）の集録内容に対する筆者の統計によれば、一九三七年二月から一九四五年八月までの八年半の間に、軍部嘱託、報道班員、出征将兵などさまざまな身分で従軍した画家の数は六一〇名に達していた。筆者所収の従軍画家の作品画像データの中で、飯野（2005）に含まれない画家が数多く発見されているので、実態はもっと多かったと見られる。

文献資料に名前が記載された従軍画家のほとんどは、その従軍の経路や創作活動の内容が不明である。そして、文献調査で作品名リストが発見された場合でも、作品現物はおろか、その作品の図版すら確認できないケースが

多い。その意味において、戦前の絵葉書に印刷された画像は従軍画家の活動実態や移動経路の解明において大きな意義を持つものと思われる。

洋画家南薫造（一八八三～一九五〇年）の従軍について、飯野（2005）では記録されていないが、本人の「従軍日記」（一九三九年三月二九日～五月二一日）が整理・発表されたことにより、その従軍活動の詳細がある程度分かるようになった。南薫造の「従軍日記」を整理した藤崎（2005：18）は「用務の一つであった絵葉書用の素材は、同年末に陸軍省に提出しているが、図版等の詳細は不明である」とコメントしたが、⁽¹⁾ 彭（2013a、2015a）は戦前絵葉書の調査を通して、南一行の従軍活動にかかわる作品図版を二十六枚発見し、その従軍日記の記述内容に照らしながら移動の時期と場所について検証を行った。一方、版画家永瀬義郎（一八九一～一九七八年）の従軍について、飯野（2005：21）では一九三九年四月に「恩地孝四郎・前川千帆・永瀬義郎、前線慰問のため陸軍嘱託として二ヶ月間、中支に赴く。永瀬は、六月帰国」としか記載されていないが、一九七七年に出版された彼の自伝『放浪貴族』を読むと、その従軍経緯や、軍部に絵葉書用の淡彩画を提供した事実などがつづられている。そして、自伝ではさらに「戦後、皇居の堀端に並んだ露店のひとつで、僕の描いた絵葉書を見つけて買ったように思うんだが、あれはどいへ行っちゃったのかなあ」（永瀬 1977：214）と回想していたので、絵葉書が戦後の露店で流通していた事実やその画像の内容は不明となっていたことが分かる。彭（2015b）は、永瀬が提出したと見られる淡彩画の絵葉書を五枚発見し、その従軍の経路と風景の地域分布の一部を明らかにした。本論で取り上げる洋画家桜庭彦治（さくらば ひこじ）は、以上の二人に比べ、文献にも記載されず、日記や自伝のような出版物もないため、その従軍の日程、経路や作品画像だけでなく、彼がかつて従軍していた事実さ

表 1 戦前画展の出品歴

時期	展覧会	洋画作品
1926 年（大正 14 年）	第 2 回白日会	池の端風景、花壇
1926 年（大正 14 年）	第 7 回帝展	洗足風景
1926 年（大正 14 年）	第 7 回中央美術展	断髪的女
1926 年（大正 15 年）	第 3 回白日会	春陽
1927 年（昭和 2 年）	第 8 回中央美術展	丘の松
1927 年（昭和 2 年）	第 14 回光風会展	真昼
1927 年（昭和 2 年）	第 8 回帝展	女と壺
1928 年（昭和 3 年）	第 9 回帝展	裸婦
1930 年（昭和 5 年）	第 2 回聖徳太子奉賛美術展	長椅子の裸婦
1930 年（昭和 5 年）	第 11 回帝展	裸婦
1932 年（昭和 7 年）	第 13 回帝展	裸婦
1933 年（昭和 8 年）	第 14 回帝展	緑蔭

表 2 戦前作品の所蔵リスト

制作年	作品名	材質・技法／寸法（縦）×寸法（横）	所蔵
1927 年	女と壺	油彩、カンヴァス／120.3×120.3cm	横浜美術館
1928 年	裸婦	油彩、カンヴァス／112.1×145.5cm	北海道立近代美術館

えもこれまで知られていなかったようである。本稿では、桜庭彦治のプロフィールや戦前・戦後の活動を概観し、戦前絵葉書の中から発見された作品画像を通して、彼の従軍軌跡の一部を明らかにしたいと思う。

2. 桜庭彦治のプロフィールと活動状況

2. 1 戦前の活動と作品

桜庭彦治（一九〇二～一九八六）のプロフィールに関する情報は限られている。「北海道美術ネット別館」（二〇一〇年四月一九日）の記述では「新潟県生まれ、札幌師範卒業後、上京。片多徳郎に師事、一九二七年東京美術学校西洋画科卒業、二六年帝展初入選。光風会会員、評議員を歴任」と書かれているが、『東京美術学校同窓生名簿』では、彼は一九二七年（昭和二年）に東京美術学校の図画師範科を卒業したと記載されている。『文展・帝展・新文展・日展全出品目録』を調べた結果、表1が示すように戦前の画壇における彼の活躍状況がある程度見

表 3 戦後作品の所蔵リスト

制作年	作品名	材質・技法／寸法（縦）×寸法（横）	所蔵
1958 年頃	三溪園	スケッチ鉛筆、紙、額／ 30.8×38.8cm	横浜美術館
1958 年	三溪園	油彩、カンヴァス／ 128.5×71.0cm	横浜美術館
1959 年頃	仲木	スケッチ鉛筆、紙、額／ 26.6×27.0cm	横浜美術館
1959 年	仲木	油彩、カンヴァス／ 110.3×160.8cm	横浜美術館
1971 年	北の夏 真駒内風景	油彩、カンヴァス／ 131.0×131.0cm	札幌芸術の森美術館
1972 年	並木道	油彩、カンヴァス／ 116.8×116.8cm	北海道立近代美術館
1973 年	真駒内の並木道	油彩、カンヴァス／ 116.7×116.6cm	札幌芸術の森美術館
1974 年	伊豆の午後・仲木	油彩、カンヴァス／ 130.6×130.0cm	札幌芸術の森美術館
1975 年	札幌秋色	油彩、カンヴァス／ 122.0×122.0cm	札幌芸術の森美術館
1983 年	松	油彩、カンヴァス／ 105.0×105.0cm	横浜美術館
1985 年	港の見える丘	油彩、カンヴァス／ 72.6×60.6cm	札幌芸術の森美術館

えてきた。

表 1 により、桜庭は大正末期から昭和初期にかけて、つまり彼が二〇代なかばから三〇代前半にかけて帝展などを中心に出品を重ねていたことが明らかになった。日本各地の美術館のコレクションを調べた結果、戦前出品された作品の中で「女と壺」と「裸婦」は現在それぞれ横浜美術館と北海道近代美術館に所蔵されていることが分かった。

2. 2 戦後の活動と作品

桜庭の戦後の活動に関して、一部光風会のホームページに記載されているが、それによれば、彼は一九六三年に神奈川光風会の創立メンバーの一人であり、一九六九年（昭和四四年）の光風会第五回展覧会で寺内賞、一九七七年（昭和五二年）光風会第六三回展覧会で桜花賞をそれぞれ受賞した。一九八五年一月一日～二月一日に横浜市民ギャラリーで「桜庭彦治自展」（主催・協力…横浜市・横浜市教育委員会）が開催された。

桜庭が戦後描いた作品の所蔵状況は、現在調べた範囲内では、表 3 の通りとなっている。

その外に、二〇〇六年八月三〇日公開のホームページ「北海道人」の「まちのお宝発掘 展覧会レポート」では北海道の中央小学校に桜庭彦治の作品「厚岸バサラン崎」（制作年不詳）が所蔵されている事実が報告されている。

今回の資料調査では、日中・太平洋戦争期間中の桜庭の活動、彼が従軍したと思われる時期の作品や関連情報などは依然不明である。その間の作品は戦時中の空襲などで焼失した可能性もあれば、多くの従軍画家がそうしたように自ら処分した可能性もある。またはその間何らかの原因で創作活動や展覧会出品を控えた可能性も考えられる。いずれにしてもその間の活動について、今後調査を続ける必要がある。

3. 発見された戦前の絵葉書図版

現在筆者所蔵の画像データの中で、戦前の従軍画家（一九〇名）が描いた絵葉書は全部で一・二・三枚である。その中で桜庭が描いたものは九枚発見されている。まずこの九枚の絵葉書に記載された文字情報を次の表4にまとめるとめる。

九枚の絵葉書図版はすべて風景画である。その画像内容の地域分布は中国の浙江省、安徽省、江西省と湖北省、つまり当時「中支」と言われる地域に限定されている。①「水都杭州」と②「飛岳廟 杭州西湖畔」は現・浙江省杭州市、③「安慶の朝」は現・安徽省安慶市、④「甘棠湖春色 九江」、⑤「牯嶺（廬山）の新緑」、⑥「五老峰（廬山）の新緑」と⑦「星子」は現・江西省九江市、⑧「垂柳の初夏漢口中山公園」、⑨「武漢大学」は現・

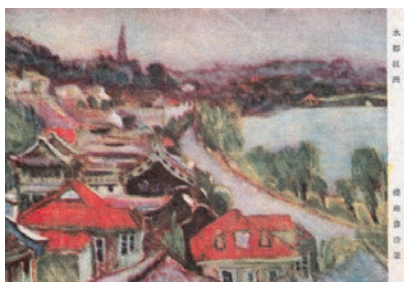
表 4 桜庭が描いた戦前絵葉書リスト

No.	作品の画題	落款	裏面の文字情報
①	水都杭州		郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、東京小林又七印刷
②	飛岳廟 杭州西湖畔	昭和十五年 桜庭彦治筆	郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、東京小林又七印刷
③	安慶の朝	昭十五	郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、東京小林又七印刷
④	甘棠湖春色 九江		郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、東京小林又七印刷
⑤	牯嶺（廬山）の新緑	昭和十五 彦治	郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、精版印刷株式会社印行
⑥	五老峰（廬山）の新緑	昭和十五年 桜庭彦治筆	郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、精版印刷株式会社印行
⑦	星子	昭和十五年 桜庭彦治	郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、精版印刷株式会社印行
⑧	垂柳の初夏 漢口中山公園	昭和十五年 桜庭彦治	郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、東京小林又七印刷
⑨	武漢大学		郵便はがき、軍事郵便、陸軍恤兵部發行、東京小林又七印刷

湖北省武漢市にそれぞれ分布している。作品に落款の文字が読み取れるのは六枚で、そのいずれにも昭和十五年と明記されている。以上の情報から桜庭は、一九四〇年頃中国の中東部地域に赴いたことがほぼ断定できる。そして、画題には「春色」「新緑」「初夏」ということばが使われたことを考えると、訪れた時期は五～六月ごろではないかと推測できる。当時戦争中なので、個人の写生旅行は考えられない。さらに、これらの作品が軍事郵便の絵葉書用に提供されたという事実を合わせて考えると、どのような身分で行ったかははっきり分らないが、彼は当時従軍していた可能性が高いと言わざるを得ない。落款に日付の記載がなく、その移動経路は不明だが、他の「中支従軍画家」の記録を参考にすると、上海あたりから上陸する経路として「浙江省（杭州）→安徽省（安慶）→江西省（九江）→湖北省（武漢）」の順で沿海地域から内陸へと移動していたのではないかと推定できる。



桜庭彦治の従軍風景画の地域分布



①水都杭州



②飛岳廟 杭州西湖畔

以下、発見された絵葉書の画像を提示する。ネット上の取引記録には桜庭が描いたスケッチの画像が一枚発見されているが、それも参考のために⑩「中支警備風景」(所有者不明)として提示する。



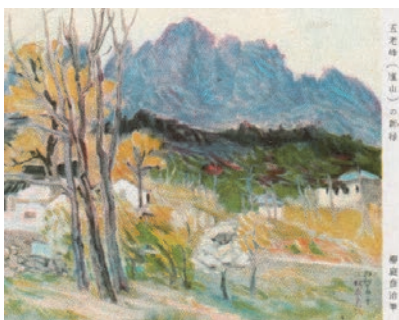
③安慶の朝



④甘棠湖春色 九江



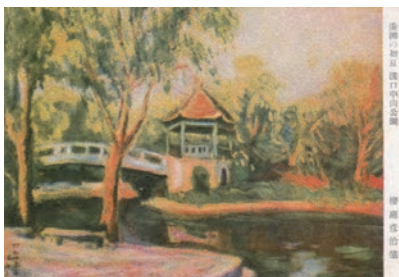
⑤牯嶺（廬山）の新緑



⑥五老峰（廬山）の新緑



⑦星子



⑧垂柳の初夏漢口中山公園



⑨武汉大学



⑩中支警備風景

4. まとめ

七〇年前の絵葉書図版だけで絵画の特徴を議論することは難しいが、①～⑨の画像には鮮やかな色遣いを好む桜庭の画風が何となく見れとれる。色彩豊かな初夏の異国風景に引付けられながら絵筆を走らせる画家の姿が目につく。同時代の従軍画家の中には桜庭と同じ場所を訪れ、同じ画題を取り上げた画家も多くいた。武漢大学を描いた画家には瀬野覚蔵、安慶の塔を描いた画家には太田天橋、奥瀬英三、廬山の五老峰を描いた画家には南薫造、小林万吾、片岡銀蔵、御厨純一、青山龍水などがいた。

従軍画家には、戦争画を描く目的で中国大陆に赴いた人もいたが、そうではない画家も少なくなかった。永瀬 (1977: 214) はかつて次のように回想していた。「陸軍に素描や淡彩画を描くようにと頼まれた。僕は戦争の絵は描かない、描きたくないと言うと、いや描かなくてもよろしい、先生には中国の美しい風景を描いてほしいと言うので、田園風景なら描きましようと言事をした」。筆者は戦前刊行の『大東亜戦争美術展集 (昭和十七年)』『戦争美術展画集 (昭和十八年)』『戦時特別美術展集 (昭和十九年)』や『靖国之

絵巻（昭和十四～十九年）』などさまざまな画集や当時の各種戦争美術の展覧会目録などを網羅的に調べたが、桜庭彦治の名とその作品の記録はどこにも現れなかった。桜庭は、永瀬同様、従軍はしたものの、風景画しか描かなかった画家の一人だったのかもしれない。

南薫造の「従軍日記」を読むと、随所に現れる美しい風景への嘆賞のことが印象的である。「今は緑の麦畑の間に菜種の花が美しい」「小舟を入れるクリークに沿ふ町で非常に面白ろい」「人家、白壁等実に宜い」「草の緑も鮮やかで点景人物も好適である」「見下ろすと村も甚だ美しい」「河に沿ふ人家が甚だ引付けた」「土地の起伏甚だ面白ろく、壊された家、壊されぬ家、樹木、華表等何とも曰へず美しい」……。大量の戦前絵葉書の風景画図版を眺めていると、桜庭を含む従軍画家たちは、軍部のプロパガンダの意図とは別に、荒廃した戦場地で、美しい風景を必死に追い求めていたのではないか、そんなような気がしてならない。

注

- (1) 発見された二十六枚の図版の中には、当時東京美術学校教授南薫造（十二枚）、同行者の同校教授小林万吾（六枚）と同校西洋画科卒業生鈴木貞三（五枚）、現地案内役の出征兵士で同校師範科卒業生松林義英（二枚）と同校油絵科予備生雨田正（一枚）が含まれる。

参考文献

- 飯野正仁 2005 「戦争に征った画家たち」『あいだ』（116～119号）「あいだ」の会
飯野正仁 2010 「〈満洲美術〉年表」『帝国』と美術』（五十殿利治編）国書刊行会

- 札幌芸術の森美術館 2011 『札幌芸術の森美術館 所蔵品図録 2011』
 東京文化財研究所美術部編 2002 『大正期美術展覧会出品目録』 中央公論美術出版
 東京美術学校同窓会名簿編集委員会 1972 『東京美術学校同窓会名簿』
 日展史編纂委員会 1990 『文展・帝展・新文展・日展全出品目録』（明治40年～昭和32年） 社団法人日展
 針生一郎他 2007 『戦争と美術1937-1945』 国書刊行会
 樋口正徳 1938 『美術の秋（昭和13年）』 朝日新聞社
 藤崎綾 2005 「南薫造『従軍日記』」『広島県立美術館研究紀要』 17-49
 彭国躍 2013a 「南薫造『従軍日記』の図版検証―戦前絵葉書的美術史拾遺」『神奈川大学評論』（74） 神奈川大学
 彭国躍 2013b 「従軍画家瀬野寛蔵とその戦地記録画―戦前絵葉書による美術史拾遺」『人文学研究所報』（50） 神奈川大学人文学研究所
 彭国躍 2015a 「南薫造『従軍日記』の図版検証（補遺）」『神奈川大学評論』（80） 神奈川大学
 彭国躍 2015b 「版画家水瀬義郎の従軍軌跡―戦前絵葉書的美術史拾遺」『人文研究』（185） 神奈川大学人文学会
 彭国躍 2015c 「幻の従軍画家三迫星洲―戦前絵葉書による図版の整理と分析」『人文学研究所報』（54） 神奈川大学人文学研究所
 山本地栄 1942 『大東亜戦争美術展集（昭和十七年）』 朝日新聞社
 山本地栄 1944 『戦争美術展画集（昭和十九年）』 朝日新聞社
 山本地栄 1945 『文部省戦時特別美術展集』 朝日新聞社
 北海道美術ネット別館：http://blog.goo.ne.jp/h-art_2005/c/fd0e50b85120fcfcad6a0b2b0d97/11
 北海道人：http://www.hokkaido-jin.jp/issue/sp/200608_2/sp_06.html
 光風会100回展記念特設サイト：<http://www.kofu-kai.jp/100/branches/kanagawah.html>